二人の強盗

ルカ福音書23:39-43
（新改訳2017訳）

23:39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。
23:40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。
23:41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」
23:42 そして言った。「イエス様。あなたが御国（みくに）に入られるときには、私を思い出してください。」
23:43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

【祈りながら考えよう】

（１）今日の記事はルカ福音書にしかない記事である。どんな問題がありますか。
（２）一人の強盗に起こった心の変化はどのように起こったのか、説明して下さい。
（３）人の死後に置かれる場所、パラダイスと陰府（よみ）の違いを説明して下さい。

【解　説】

（１）ルカ特有の記事

今日の学びの箇所は、ルカ福音書特有の記事である。他の福音書にはない。それで、
①ある学者は、これは史的事実に基づかない、ルカがただドラマチックに書いたのだという意見を述べている。
②他の学者たちは、ルカが、イエス・キリストの福音の真理として、大きな感動を与えられた記事であると述べている。
　ルカに伝えたのは、ゴルゴタへの道で、イエスに代わって無理やり十字架を負わされたクレネ人シモンが、しばらくして後に、見聞きした者として伝えた、それをルカが書き留めた、と推察する。
③また、イエスの処刑を指揮した百人隊長が、この事を伝えた、と推察する人もいる。
④ルカ福音書の著者ルカはパウロの弟子であるが、パウロからこの事を聞いて書いた歴史的な事実であると述べている。
　ルカはイエスの十字架後になって信仰を持った人であるから、この時にこの場にいたわけではない。だれかから聞いたか、あるいは何かの資料に基づいてこの事を書いたと推察する。
　もしルカがパウロから聞いたとすると、パウロはこの時はまだ弟子でもない。ではどうしてパウロはこの事を知ったのか、それはクレネ人シモンとの関係においてであると考えられる。
　クレネ人シモンが負わされたあの不当な十字架が、後にはシモンにとって慕わしい十字架に変わった。自分が負うのが当たり前であったのに、イエス様が負われた。
　罪人の自分が十字架にかからないで、イエス様が代わってかかって下さったということが、本当にわかってきた。
イエスを信じる者になり、家族も信仰を持つということになってきた時、後にパウロがこの家族と親しくなったと考えられる。他の福音書にないからといって、ルカ福音書の特定の記事を歴史的事実ではないとすることはできない。

（２）イエスをののしるこの世

《十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。》

マタイ、マルコによると、この二人の強盗は、最初のうちは一緒にイエスをののしっていたようである。マルコ福音書を見ると、15章32節の後半に、《一緒に十字架につけられていた者たちもイエスをののしった》とある。マタイ福音書27章38節では、《そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、一人は左に、十字架につけられていた》とあって、44節に《イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった》とある。
通りがかりの民衆が足をとめて、イエスの十字架の上で苦しんでいるその姿を見ていた。そしてののしり始めた。
「キリストだ、神の子だと言っていたが、いったいそのざまは何だ。もし本当にキリストなら、自分を救って降りてくるがいい」
またイエスを十字架につけた直接の指導者であり、扇動者であったユダヤのサンヘドリンの議員たち、祭司長、学者、パリサイ人、こういった者たちもそこに立っていて、そうして憎々しげにイエスをののしった。
「自分自身を救うことのできない者が、どうしてキリストと言えるのか。メシヤと言えるのか。まず自分自身を救ってみるがいい。十字架から降りてこい。そうしたら私たちも信じようではないか」、そう言ってののしっている。
さらに、イエスを十字架にはりつけるために働いたローマの兵士たちも、一緒になってののしった。これはルカ福音書にある。
「お前がユダヤ人の王であるなら、まず自分を救ったらいいではないか。自分を救えないで、どうして民の王たることができるのか」と言ってイエスをののしった。

ゴルゴタの丘で

一緒に十字架にかかった強盗たちも同じようにののしったとあるから、同じような事を言ってイエスをののしった。自分たちは今こんなに苦しんでいる、のたうちまわって苦しんでいる。だからお前が本当にキリストなら、まず自分を救い、私たちを救えと。

彼らがののしるのは同じである。１つである。自分をまず救えということである。
群衆も、また議員たちも、ローマの兵士も、そして一緒に十字架にかけられた強盗も、みな、自分を救え、そうして我々を救え、そう言っている。

（３）一人の強盗に起こった変化

マタイ、マルコによれば、最初は二人とも同じようにイエスをののしっていた。その苦しさのあまり、イエスに当たった。お前が救い主なら、自分と同時に我々を救え、そう言ってののしった。
そうしているうちに、二人の強盗の間に違いが起こってきた。一人の強盗はいよいよ激しくイエスをののしり続けた。苦しみが増すにつれてイエスをののしり続けた。救い主だなんて言ったって、何の役にも立たない。この苦しさから救うことはできないのか。それがなんで救い主なんだと、悪口を言い続けた。
イエスは、自分を十字架につけた者たちのためにとりなして、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」と、少しの恨（うら）みなく、憎（にく）しみもない、ただ無知のゆえにこのようなことをする者たちのために、父なる神にとりなしておられる、このイエスのとりなしの言葉やイエスの態度が、強盗の心の奥に訴えるものがあったのであろう。

イエスのことがだんだん分かってきた。このお方は自分たちとは全く違う。自分たちはさんざん悪いことをしてきた。そして当然な報いとして、この十字架刑を受けている。
しかしこのお方は、なんにも悪いことをしないのに、自分たちと同じように同じ十字架にかけられて、しかも何1つ不当をつぶやかず、なじらず、憎（にく）まず、恨（うら）まない。さらに、そのような目にあわせる者たちを心からゆるし、その罪のためにとりなしておられる。あまりにも違った姿がわかってきた。そしてついに悪口を言う言葉が出なくなってしまった。
彼の心はイエスにとらわれていった。自分の仲間とイエスの姿、また自分自身とイエスの姿、あまりにも違っている。また群衆たちの姿、祭司長、律法学者たち、兵士たち、その中にあるこのイエスの全く違った姿。それが分かってきた。
自分の口から悪口が出なくなって、今度は、なおも悪口を言い続けている仲間を、ついにたしなめるに至った。そこで、《もう一人が彼をたしなめて》ということになった。その過程が、マタイ、マルコの記事と合わせて読む時に、読み取れる。

（４）十字架は私に当然だ

悔い改めの過程が、この強盗にはっきりと示されている。
《すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか》
自分自身の中に神を恐れる心が始まっていることを示している。また自分の罪を認めることができるようになった。
今までは十字架の苦しさに、なぜ救わないのかと、イエスに食ってかかっていた心は、
《おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ》と、
十字架を自分のしたことの報いとして受け取っている。
《だがこの方は、悪いことを何もしていない》
しかし、イエスには少しの罪もない。それなのに、なぜ、すべての人のために、とりなしの祈りをして、十字架の苦しみをご自分の身に受けておられるのか。
このお方こそメシアだ。救い主だ。だからこそ、十字架から降りないで、自分自身を救おうとしない。私たちのためにすべての罪を負って死なれる。そういうことが分かってきた。

（５）悔い改めた者の願い

《そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」》

①自分の罪を認めた謙虚な願い

《あなたが御国に入られるときには》とは、キリストの再臨の時のことである。このお方はここで死ぬが、しかし決して死で終わるお方ではない。再びおいでになる。その時には、神の国の権威を持っておいでになる。その再臨のキリストへの信仰、神の国が再臨の時に実現するという信仰にまで導かれている。これは驚くべき信仰である。この強盗は、イエスが死者の中からよみがえられ、やがてこの世界を治められることを信じていたのである。

また、キリストの再臨の時に、私をあなたの家来にしてくださいとか、よき位置を与えて下さいとか、そんなことは言えたものではない。《私を思い出してください》と言っている。

あなたが十字架におかかりになった時、隣りに一人の犯罪人がいた。そして一緒に死んだ。そんな哀れな者がいたということを、どうか心の端に思い出して下さい。これは自分を低い所に置いた、謙虚な願いである。

②自分の罪を認めない傲慢な態度

二人の強盗、悪において差は少しもない。しかし、一人は罪を認めて悔い改めた。一人は最後まで自分の罪を認めなかった。最後までイエスをののしり続けた。

《おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え》　なんという不遜な態度、自分を知らない傲慢な態度、神を恐れない態度がここにある。

（６）神に受け入れられるわざ

最初は同じだったが、ひとりは低くされていった。自分の罪を本当に認める心こそが真に低い心、貧しい心である。

倫理道徳や修養で心低くなれるか。かえって傲慢（ごうまん）になるだけである。私はこんなに心の低い者だ、謙遜な者だと言っても、自分でしたことはすべて己を高くする。罪人がすることは、罪以外になにもできない。何かをして自分がよくなったと思うだけ、低くなったと思うだけ、かえってそれが神の前には傲慢（ごうまん）な者になる。

出来ることがあるとすれば、それは悔い改めた強盗のように、イエスの前に自分の罪を認めて、心底からイエスによりすがる、イエスに対する信仰だけである。

《神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです》（ヨハネ6:29）と、イエスははっきり言われた。神が遣わした者であるイエス・キリストを信じる、これこそ神に受け入れられる「神のわざ」である。

（７）パラダイス行きの第1号は強盗

《イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。
あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」》

主イエスは、悔い改めた強盗に、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいる」と言われた。

ひとりは陰府（よみ）へ、ひとりはキリストと共にパラダイスへ。この中間はありません。

聖書には、ローマ・カトリックが教えるような煉獄（れんごく）（人間が罪の償いを果たすまで霊魂が苦しみを受け、それによって浄化される所／天国に入れるほど聖でもないが地獄に行くほど邪（じゃ）でもない者が、天国に入れるようになるまでいる所と主張）なるものはないことの証拠がここにある。

罪と恥辱の人生を送った後に悔い改めたこの強盗は、ただちに至福のパラダイスへと迎え入れられた。イエスこそパラダイスへの道である。

本来、ゲヘナの火の池に投げ込まれるべき者が、イエスと共にパラダイスにいるとはどういうことか。悔い改めである。

自分の罪を心底から認めること。そしていっさいを主イエスによりすがる。

神は、この罪人を救うためにイエスをこの世にお遣わし下さった。そして不当な十字架を負わせ、人間の受けるべき刑罰をイエスに負わせた。

この救いを受ける道はただ１つである。自分の不義を認めて、救い主なるイエスの前に自分のいっさいを投げ出していくことがあるだけである。

アブラハムの懐と陰府（よみ）

（８）パラダイスか、陰府（よみ）か

①パラダイスとはどんな所か

《パラダイス》という言葉は、古代ペルシャ語からきている。園、庭園、楽園という意味の言葉である。これをギリシャ語訳旧約聖書（70人訳）において、創世記２章の中に「園」という言葉があるが、それをパラダイス（παράδεισος）とギリシャ語で訳した。

罪を犯さなかった以前のエデンの園は、人間にとって楽園であった。楽しい世界、明るい世界であった。しかし、人間が罪を犯し、神に背いてからこの楽園は失われてしまった。

イエス様の時代のユダヤ人たちの間では、このパラダイスはもはや地上に見いだされるものではなくて、義人が死後に行く所、それがパラダイスとされていた。また悪人が死後に行く所は陰府（よみ）（ハデス）と呼ばれている。

死後の区別が、ルカ福音書16章19-31節の「ある金持ちと貧しい人ラザロ」の記事の中にある。22節に、

《この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懐（ふところ）に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた》

《アブラハムの懐（ふところ）》とは、神に祝福された信仰の父アブラハムがいる所、すなわち天のパラダイスである。

《金持ちも死んで葬られた。金持ちが、よみ（ハデス）で苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐（ふところ）にいるラザロが見えた》とある。このように、同じに死んでもその霊魂の行く所が別々になる。貧乏人ラザロはアブラハムの懐（ふところ）、すなわち天のパラダイスに。金持ちの方は陰府（よみ）に、すなわち炎の中で苦しむ所に行った。

②陰府（よみ）とはどんな所か

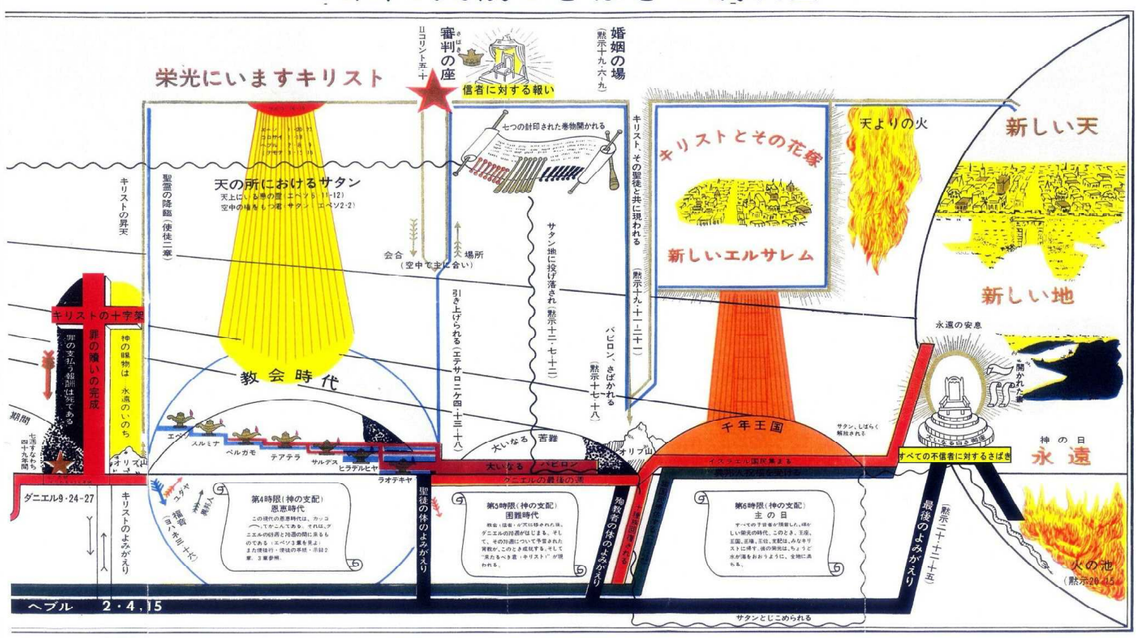
陰府（よみ）（ヘ ハデス/ᾅδης）とは、イエスの再臨後に神の国が実現する時まで、死者の霊がいる所である。キリストにあって死んだ者、神様の憐れみの中に死んだ者は、アブラハムのいる所、神のみもとで安（やす）らいながら、復活の時を待つ。それがパラダイスである。

悔い改めなかった強盗は、炎の燃える陰府（よみ）に行ったであろう。しかし、それが最後ではない。その先にゲヘナがある。キリストの再臨のあとに陰府（よみ）から引き出されて、神様の審判に会う、その時には自分の罪を認めさせられ、そして永遠のゲヘナの火の池に投げ込まれる。ヨハネの黙示録20章13-15節を読むと、

《海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。
いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。》

自分の罪を認め、悔い改めて、主の救いを受けることのできた者は真に幸いである。主と共にパラダイスにあり、来たるべき復活の時を待つ。そしてすばらしい永遠の神の国に自分を見いだす者となる。そうでない者は、死んで陰府（よみ）に行き、さらに引き出されて、神の大審判（白い御座での裁き）の後、永遠の火の池、ゲヘナに投げ入れられる。

人間の死後のさばきの説明図



永遠から永遠までの時間進行図（A.E.ブース著／伝道出版社）より一部転載